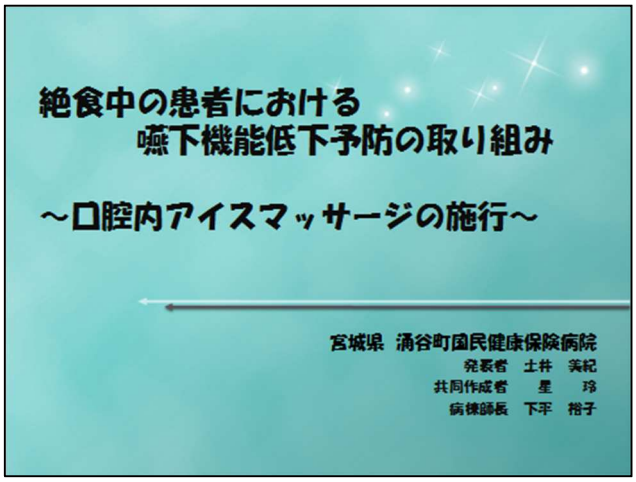
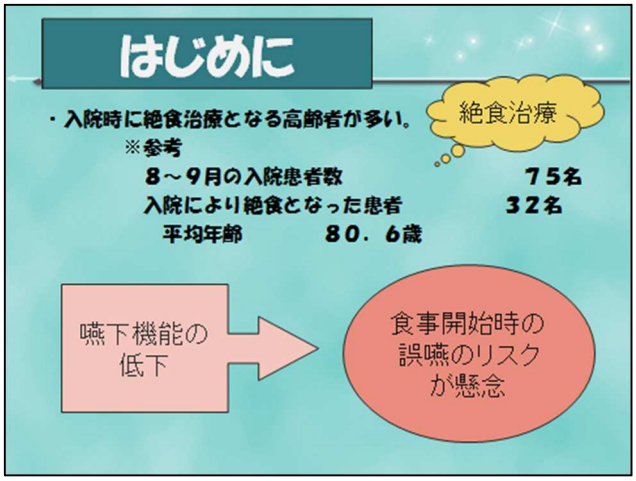
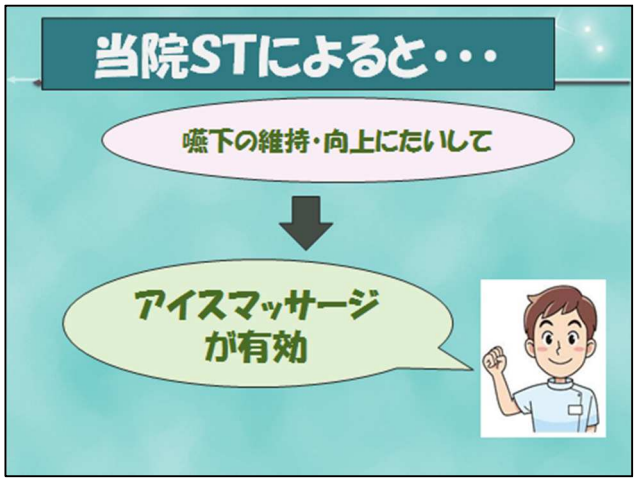
演 題 9	絶食中の患者における嚥下機能低下予防の取り組み ～口腔内アイスマッサージの施行～
	発　表　者　土井 美紀（宮城県　涌谷町国民健康保険病院） 共同研究者　星 玲、下平 裕子



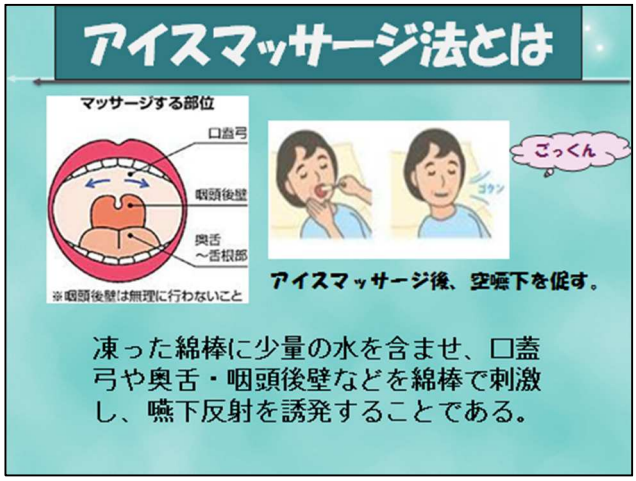


【はじめに】

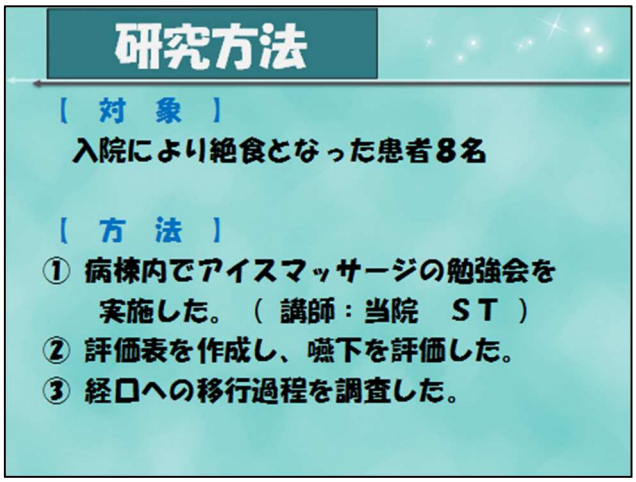
当病棟では、入院時に絶食治療の必要な高齢患者が多く、嚥下機能の低下から食事再開時の誤嚥のリスクが懸念されている。多くの患者は、急性期治療を経て約 4 日～1 週間後に ST 依頼を受け、嚥下機能の評価・訓練食へと移行する。



当院 ST によると、嚥下の維持・向上に対してアイスマッサージ法が有効であるという指導を受けた。



アイスマッサージ法とは、凍った綿棒に少量の水を付けて、口蓋弓や奥舌、咽頭後壁などを綿棒で刺激し、嚥下反射を誘発することである。



【研究対象・方法】

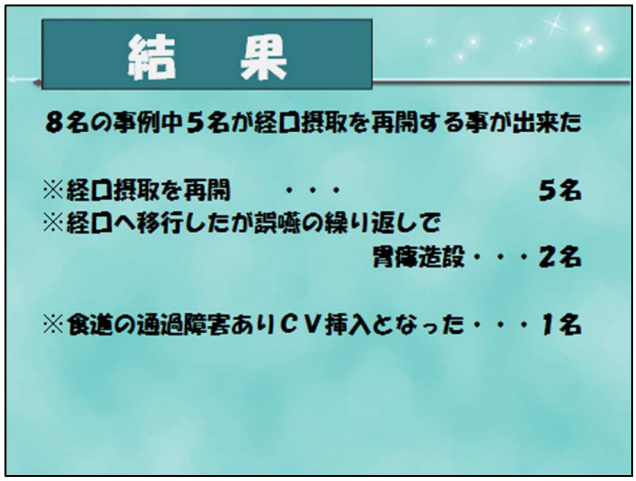
対象：入院（H26.8 月～9 月の期間）により、絶食となった患者（今回の事例は 8 人）

※参考　8 月～9 月の入院患者 75 名に対し、絶食となった患者は 32 名平均年齢は 80.6 歳

方法：①病棟内でアイスマッサージの勉強会を実施（講師　ST）

②アイスマッサージ施行時の患者の状態を記入する評価表を作成し嚥下状態を評価

③経口移行の過程を評価

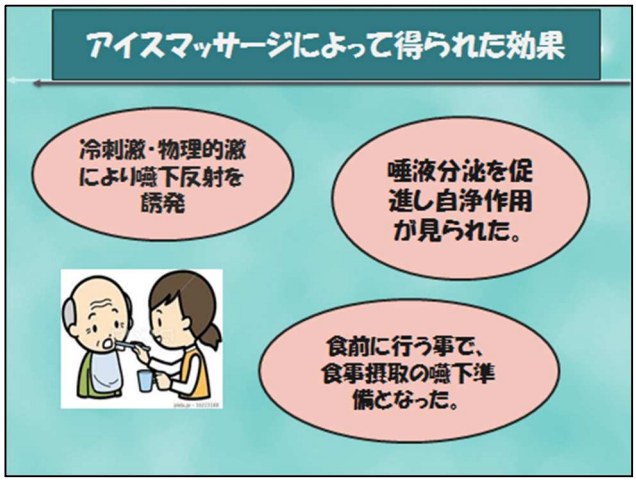


【結果】

８名の事例患者の内、5 名が経口摂取を再開し退院する事が出来た。

※経口移行したが、誤嚥を繰り返し胃瘻造設した患者は 2 名

※食道に通過障害があり、CV カテーテル挿入し高カロリー輸液となった患者 1 名。



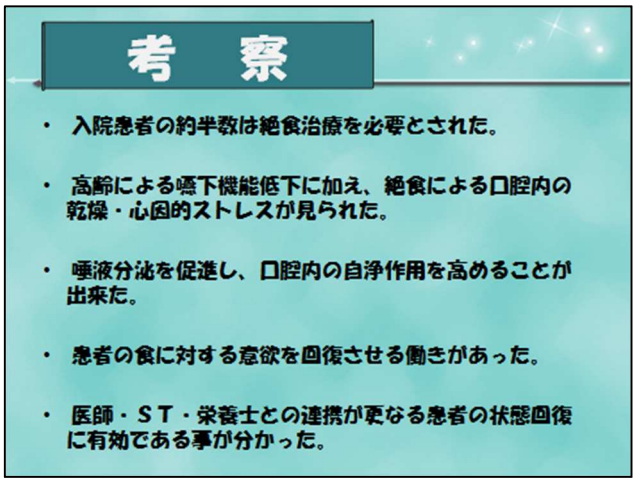
アイスマッサージによって得られた効果

・冷刺激、物理的刺激により、嚥下反射を誘発出来

た。

・唾液分泌を促進し自浄作用が見られた。

・食前に行う事で、食事摂取の嚥下準備となった。



【考察】

入院患者の約半数が絶食治療を必要とされ、高齢による嚥下機能の低下に加え、口腔内の乾燥や心因的なストレスが見られた。結果としては、全ての事例患者に対し、嚥下機能の維持・向上につなげることは出来なかったが、今回口腔ケアに加え入院早期からアイスマッサージを施行したことで、嚥下反射を刺激することにより、唾液分泌を促進し、口腔内の自浄作用と保清を高める事が出来た。

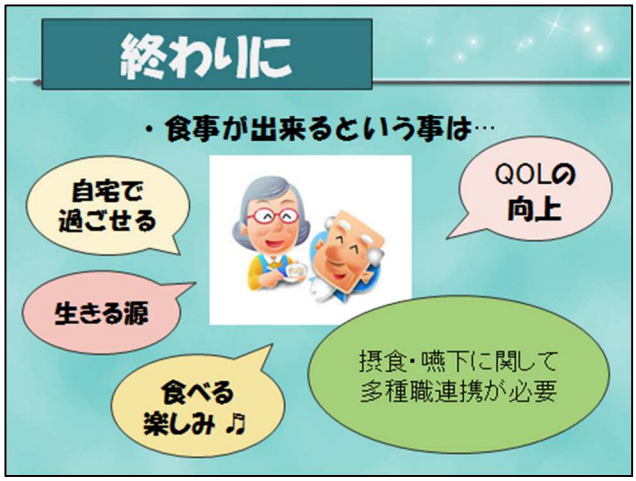
また、アイスマッサージの評価を見て、経口移行の時期を医師・ST と検討する事が出来た。食事形態に関しては、ST と情報を共有し段階的摂食訓練（ゼリー食から開始し、ソフト食、刻み食、一口大へと形態アップ）を用いる事で、安全に患者に適した食事形態を検討する事が出来た。食事形態が適したものになれば、摂取量も安定し、次に栄養士と必要カロリーや採血データからアセスメントして栄養補助食品を用いたり、更なる栄養状態の改善に取り込む事が出来た。

以上の事から、入院による機能低下が進む中、治療を受けながら、安全に食事摂取が進められるよう、摂取・嚥下・栄養に関しても多職種との連携が必要であると考えられる。

患者は経口摂取可能となれば、全身状態も徐々に回復され、ADL の拡大・QOL の向上にもつながって行き、自宅退院や入院前の施設へ戻る事が出来る。

そして、再び口から食べられると言う喜びも患者・家族、医療者間で味わう事が出来た。そのためにも、絶食期間中に看護師が取り組めるケアの一つとしてアイスマッサージに着眼した事は、口腔内の保清や嚥下機能を低下させない事の他に、患者の食に対する意欲を回復させる働きもあったと考えられる。

今回の取り組みにより、高齢者の絶食治療による弊害や入院早期からのアイスマッサージの有効性を考える良い機会となった。



【終わりに】

食事が出来ると言う事は、生活の上での楽しみでもあり、多くの患者が経口摂取で退院でき元の場所、すなわち自宅や施設に帰れる喜びも感じられる事が出来た。摂食・嚥下に関して多職種との連携が必要だと再認識する事が出来、日々のケアの向上にもつながって行くことも実感できた。今後もこの事を生かして行きたい。